

## 夢の記述——『マクシマス詩篇』『トウイスト』について——(上)

平 野 順 雄

「トウイスト」(“The Twist”)とは、全三十八篇の詩から成るチャールズ・オルソン作『マクシマス詩篇・第一巻』(The Maximus Poems, Volume One, 1950-1960)の十八番目に位置する詩の名である。<sup>①)</sup>『第一巻』の詩的企図は、商業主義によつて毒され、墮落し果てたマサチューセッツ州アン岬の漁港都市グロスター(Gloucester)を、今も

始源の息づく「花の都市」として再生させることにあるのだが、この試みは失敗したようだ。『第一巻』を閉じる詩の中で、語り手マクシマスは、無残なグロスターの現在を相手に戦う戦いにはほとほと疲れしましたよ、と言わんばかりに重い溜息をついて見せた後、グロスターから立ち去ってしまうのだから。<sup>②)</sup>

こう言うと『第一巻』全体は、もの哀しい敗北の調べに浸されたグロスターへの晩歌に聞こえるかもしれない。だがそうではない。全篇心躍る詩的実験に満ちた生の舞踏『マクシマス詩篇』に、勝ち負けなどありえようもないのである。

では、「トウイスト」で行われる実験とは何か。それは、夢の導入である。ならば、夢の導入によつて詩はどのような次元を獲得するのか。この問いに答えるためには、まずはテクストを見なければならぬ。

### I 『マクシマス詩篇』『トウイスト』試訳

#### トウイスト

路面電車こそ

おれの内陸水路

(タトナック・スクエアに着き、

終点から徒歩で

バクストンへ向かい、<sup>メイ・フラワー</sup>五月の花を摘む

5

あるいは旧道を通つて、ホールデンへ向かい  
イギリス・クルミを集める

妻が新たに赤ん坊を生むのも  
そんな線路の終点にある

家でのこと。出産した翌日には  
家に帰れる状態。赤ん坊もそう。

10

ひととき健康で発育も上々

あるいは、高らかに歌うことと

物そのものに

歌をひそませることを

区別する、あいつとおれ。

あいつに、おれは花を

(キセニアを) 植えてやる

あいつの家の

中の、湿った土に

最初の詩に書いたとおり

潮が満ちると

アニスクアム河は、ふくれ上がる。彼女が

バイアスに断つて、作ったフランス風

ドレスのように

ああ おれの小潮、

おれの大潮、わが

流れよ

一

87  
1.83

ニュートン・スクエアからタトナック・スクエアまで、線路は  
丘を登って行く。カーヴにさしかかると

30

車両はガタゴト揺れる

やがて揺れは収まり、電車は

遠くの土地へ降りて行く

(日曜日の土地へ)

ぼくは小さく、皆が

どこへ行くのか、不思議で

しょうがない。みんなは大きくて

父さんとぼくから離れて行く

まるで、その風景の中の雌牛のように

自分たちが何をしていて

どこへ向かつているのか

分かっているのは、

父さんとぼく二人きりのよう

今頃やつと分かった。セヴァーン河だったのだ。

ウースターからグロスターを通って

ブリストーとスミスが呼んだ町に流れ込む河は。

今でも、約束の地としか思えない場所へ

幾組ものカップルは、向かつて行ったのだった。おれたちから

直角に離れて。グロスターとボストンとの間に

立ち現われる、あの風景の中へ

わくわくと、胸ときめかせ、おれは入って行く

住居を下に見おろして

50

45

40

35

二

われわれ一家が着いた日の  
グロスターは雨。

それ以来、舟で港を巡るおれだが、

ジョニーズ・キャンデイ・キッチン店内から

窓ガラス越しに雨を透かして見たのが

海を見た

初め

55

おれのもとを去った後、

妻が棲んでいた

アパートは

ケーキのよう

60

88  
1.88

居場所を突きとめた時、

——アパートの住人は、かつてチャールズ通りで

一階下に住んでいたマコーマーの手合い——隣の部屋から

山高帽を被った男が、そそくさと出て行った

妻のアソコに

弾丸をぶち込んだ奴だ

65

でなけりや、馬券屋

シユウオーツか。こいつの義母となら

大はしやぎで寝たものを

70

部屋の（建物は

お菓子（<sup>ドボシネトル</sup>家）ドアは

ずいぶん高い所についていて

四十八号室と札がある

ドアは小さく

まるでオーヴンの扉

港は

聖ヴァレンティン・デイの夜と同じ

嵐。空

海 陸 の区別なく、宙を乱舞する

氷と 風と 雪は（ピシマスよ）ひとつ

空からケーキが降ってくる

おれと同じくらい静かに

あの夜のブリザードと

同じくらい静かに

85

三

訪ねて行った

おもちゃの家で目覚めた時、窓の

外の景色が

贈ってくれたのは、朝陽の

90

白と、シャベルを使う  
人びとの姿

89  
1.85

大あわてで  
家に帰った

95

運河のあたり一帯は  
ヴァンドラ伯母さんがくれた  
紙の村。伯母さんの  
クリスマス・プレゼントは、どれも  
こういうおもちゃ

100

1日の終わりに訪れる夢のような  
おもちゃ。ニューヨーク三番街の高架鉄道<sup>エ</sup>は  
取り壊しになるが、高さ数インチのおれの高架鉄道は、  
ボストンの高架同様、今もある。  
モノレールに

105

列車を走らせると、  
——幾晩も前のことではない——  
虜になってしまうのだ、河の姿に。  
まさしく、橋のところ

流出し、流入する河の姿に

110

はつきりと見えてくる  
発見サレザル地、

背後にひかえる湿地や、プリンマンの造った溝、潮に洗われ  
唸り声を上げる犬岩

一四二

河の潮は、上流で唸っているが  
出番が来ると、萼と花冠をはじき  
犬岩をかすめて急行させる

115

花々は折れる  
(八月、

が、葯は  
いまの花糸は、花の塊りは  
進み続け、

120

そのすべてが  
この針先の一点に  
達すると  
回り出すのだ

125

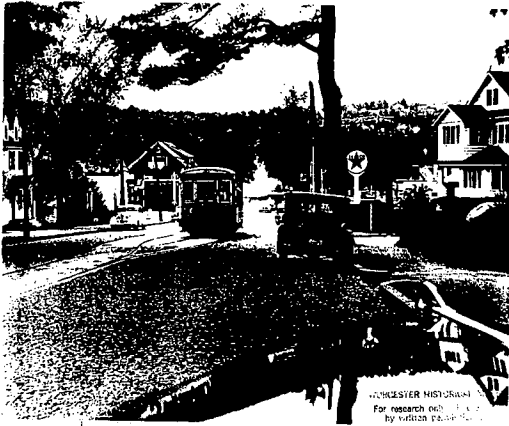
今日の陽ざしを浴びて

この真実の物語の中で

90  
1.86

そこでは、砕けた花々の水路が幾筋もの道になり  
ここでは、ブラックベリーが花をつける

130

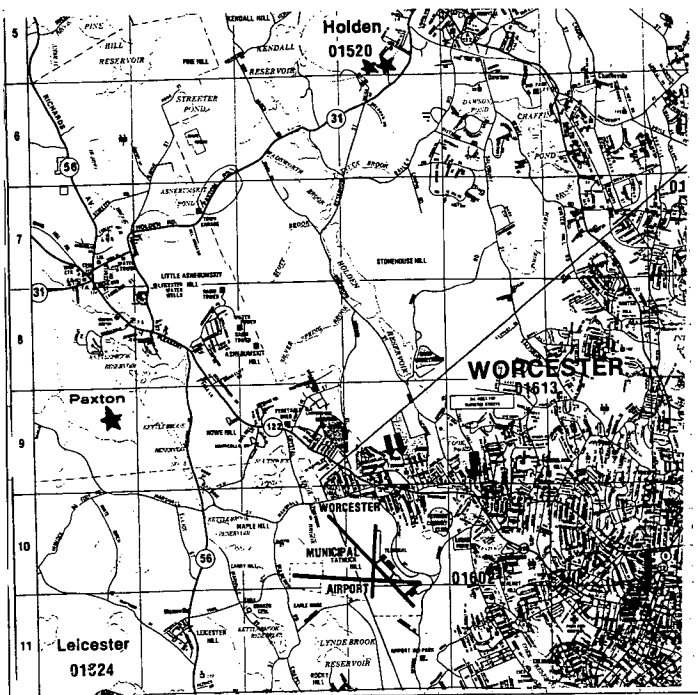


WORCESTER STREET RAILWAY COMPANY  
#385 DT AR Bradley 1927  
on line 2, West Tatnuck  
on the turnout on Pleasant St. near  
Powers Rd. approaching Tatnuck Square  
Worcester, Mass.  
Date: circa late 1930s (CD)  
Note: Car is signed up for Hamilton St.  
even though on the West Tatnuck line.

プレザント・ストリート沿いにタトナック・スクエアへ  
向かう路面電車。1930年頃の写真。資料提供: ウースター  
歴史博物館 (Worcester Historical Museum)

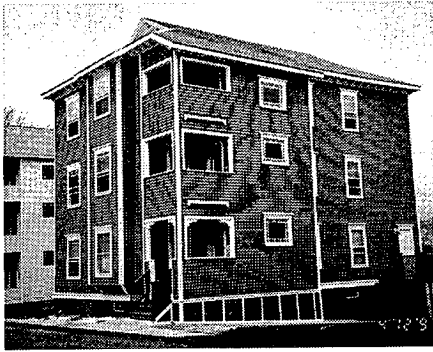
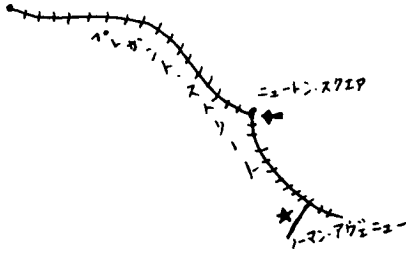
「トウイスト」…一九五三年五月、ブラック・マウンテン大学で書かれ  
た、とバトリックは言う。George F. Buttrick, *A Guide to The Maximus  
Poems of Charles Olson* (Berkeley: University of California Press, 1978)  
一四四頁参照。

タトナック・スクエア…作者オルソン (Charles Olson, 1910-1970) の生  
まれ故郷マサチューセッツ州ウースター (Worcester) を走ってい  
た路面電車の駅名。プレザント・ストリートに沿って、ウースター  
市内を東西に走る「路線2」(Route 2) 西端の終着駅であった。終  
着駅とはいえ、電車は更に先の西タトナック (West Tatnuck) まで  
下り、そこで方向変換したので、郊外へ向かう乗客にとって、事実  
上の終点は西タトナックだったと言っている。



タトナック・スクエアの位置は、左図の印を西タトナックは印を参照  
されたい。  
パクストン…ウースター西北に隣接する町。左図の印参照。  
ホルデン…ウースター北西に隣接する町。左図の印参照。

外ハ・ス・エ・ア



父カール、母メアリー、少年チャールズ・オルソンは、この家の2階に住んでいた。 撮影：平野順雄

妻が新たに……発育も上々……夢の記述。Butterick、一二五頁参照。  
高らかに歌うこと……湿った土に……夢の記述。Butterick、一二五頁参照。  
あいつ……アメリカ詩人エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) のこと。  
最初の詩に書いたとおり……マクシマス詩篇「冒頭の「手紙 1」でもなく、オルソンが最初に発表した詩を指すのでもない。一九四五年から四十六年頃書いた「Marty the Marrow」を指す、とパトリックは推察する。「アニスクアム河」と「フランス風ドレス・カット」がそこに出現しているからである。Butterick、一二六頁参照。

セヴァーン河……イギリス東南部を流れ、ブリストル海峡に流れ込む河。「ウースター」「グロスター」は、セヴァーン河の畔の町名。オルソンの生れ故郷ウースター、及び「マクシマス詩篇・第一巻」の舞台グロスターの名は、ここに由来する。  
Butterick、一二七頁。  
プリストリー……イギリス東南部の町プリストルは、セヴァーン河がブリストル海峡に、流れ込む所にある。一七世紀には、しばしば「Bristol」と綴られた。  
Butterick、一二七頁より。  
スミス・ジョン・スミス (John Smith, c1580-1631)。イギリスの探検家・軍人・著作家。北アメリカに初めて恒久的なイギリスの植民地を作った。一六〇七年ヴァージニアに航海し、ジェイムズタウンを建設。同年、アメリカインディアンの酋長パウアタン (Powhatan) に捕らえられたが、その娘ポカホンタス (Pocahontas) に救われた話は有名。一六一四年、ニューイングランド沿岸の海図を作成し、一六一六年には『ニューイングランド素描』(A Description of New England) を著わした。  
グロスターとボストンとの間に……住居を下に見おろして……夢の記述。  
Butterick、一二七―一二八頁参照。

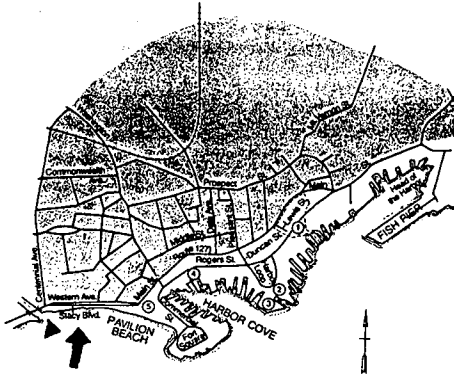


<参照地図>

夢の記述ー『マクシマス詩篇』『トウイスト』についてー (上)

ジョニー・ズ・キャン

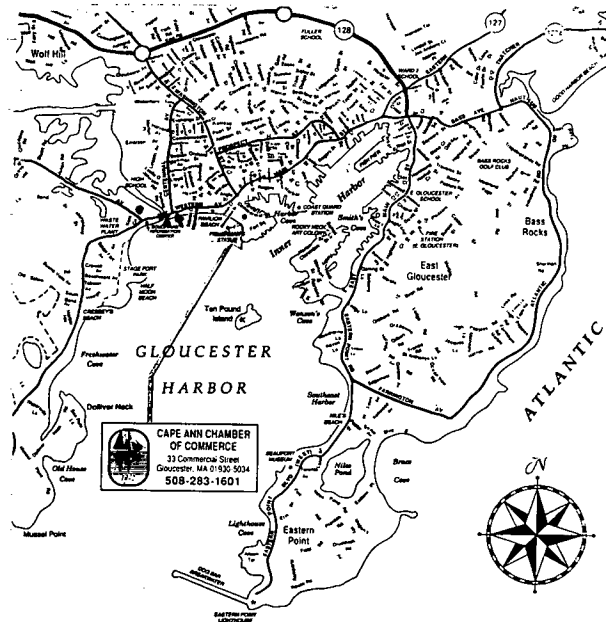
デイ・キツチン..  
ジョニー・モーガン菓子店はウェスタン・アヴェニュー八〇番地にあった。後にステイシー・ブルヴァールと名付けられる海岸通りの南側、「運河」(Can)付近にあった。Buttrick, 一二八頁。



A southerly gale piles in to Pavilion Beach around 1910. The view is in line with 71 Western Avenue. Johnnie Morgan's sweet shop is astride today's mall, and Sisy Boulevard will run outside the seawall in another decade. The Man at the Wheel will stand sixty feet out in Gloucester Harbor from the post at the end of the wall.

ジョニー・モーガン菓子店のあったステイシー・ブルヴァールの位置。▲印は「運河」 Joseph E. Garland, *The Gloucester Guide: A Stroll through Place and Time* (Rockport, Massachusetts: Protean Press, 1990), p. 141 より。

1910年頃のジョニー・モーガン菓子店 Joseph E. Garland, *The Gloucester Guide: A Stroll through Place and Time* (Rockport, Massachusetts: Protean Press, 1990), p. 141 より。



Cape Ann Chamber of Commerce 発行の地図。

▲印は「運河」を示し、↑印はステイシー・ブルヴァールの位置を示す。

●印はセント・サークルを示す。

おれのもとを去った後……ドアは小さく／まるでオーヴンの扉・夢の記述。Butterick, 一二八—一二〇頁。

チャールズ通り・ボストンの中心地にある二つの公園、ボストン・コモ  
ンとパブリック・ガーデンの間をほぼ南北に走る通りの名。

マコーマー・オルソンの最初の妻コンスタンス・ウィルコック (Constance Wilcock) のいとこの名。バトリックは、一九七四年四月にコン  
スタンス自身からこの事を聞いたと言う。Butterick, 一二九頁参照。

馬券屋シュウオーツ・レスター・B・シュウオーツ。グロスターのエ  
セックス・アヴェニュー、ケント・サークル付近に住んでいた。前  
掲地図●印参照。一九三九年から四〇年にかけての冬、オルソンは  
シュウオーツとその義理の母と一つ屋根の下に住んでいた。

Butterick, 一二九—一三〇頁参照。

ドボシュトルテ：通例七層の薄いスポンジケーキの間にモカチョコレ  
ー  
トをはさみ、上にカルメラがけたトルテ。

聖ヴァレンティン・デイの夜と同じ／嵐：一九四〇年二月一四日聖ヴァ  
レンティン・デイに米国北東部は猛吹雪に襲われ、とり分けアン  
岬の被害は大きかった。Butterick, 一二〇頁。

氷と 雪は (ピシアスよ) ひとつ・マッサリア (マルセイユ)  
のピシアス Pytheas of Massalia (Marseilles) は、紀元前四世紀ギリ  
シャの探検家。イングランド及びヨーロッパ大西洋岸を訪れ、その  
様子を記述した最初のギリシャ人である。ストラボンによれば、ピ  
シアスは、イギリス諸島最北、ブリテン島より北へ六日間航海した  
海域にテュール (Thule) という島があると伝え、「そこでは陸地と  
海と大気の区別がない。三者は海の肺の如く混じり合い、陸地も海  
も何もかもが浮かんでいて、しかも一つに結ばれている。徒歩で渡  
ることも船で渡ることもしできない島である」と報告している。  
Butterick, 九四頁より。

### 三

運河のあたり一帯は……紙の村：夢の記述。Butterick, 一二〇頁。  
ヴァンドラ伯母さん：オルソンの父カールの姉ヴァンドラ・ヘッジズ  
(Vandla Hedges, 1875-1948) のこと。マサチューセッツ州ウエルズ

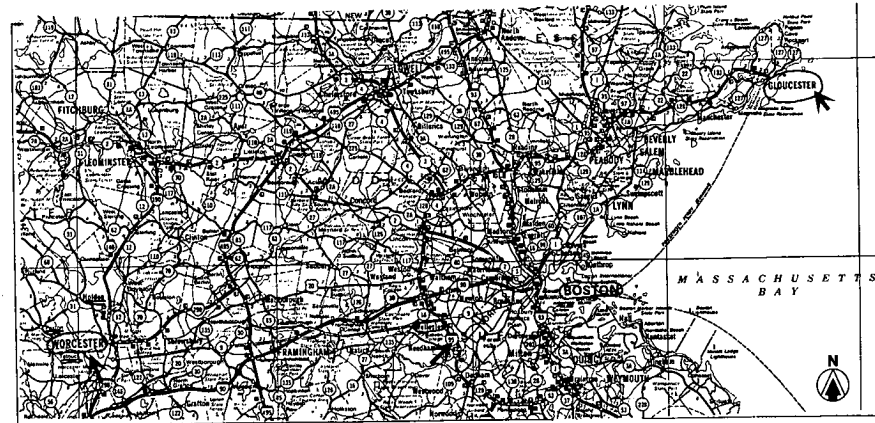
リー (Wellesley) に住んでいた。Butterick, 一二二頁。ウエルズリー  
の位置及びウイニスターとグロスターの位置関係については、下図参  
照。「トウイスト」

冒頭で言及された  
タトナック、パク  
ストン、ホールデ  
ンには二重下線を  
施した。

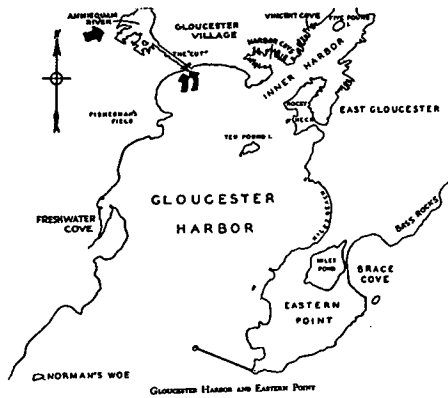
ニューヨーク三番街の  
高架鉄道……一九五  
四年、ニューヨー  
ク市の決定により  
取り壊された。  
「トウイスト」が書  
かれた一九五三年  
春には、既に取り  
壊しが論議されて  
いた。Butterick,  
一三一頁。

河：アン岬をアメリカ  
本土と分かつアニ  
スクラム河 (Annis-  
quam River) のこ  
と。左図●印参照。

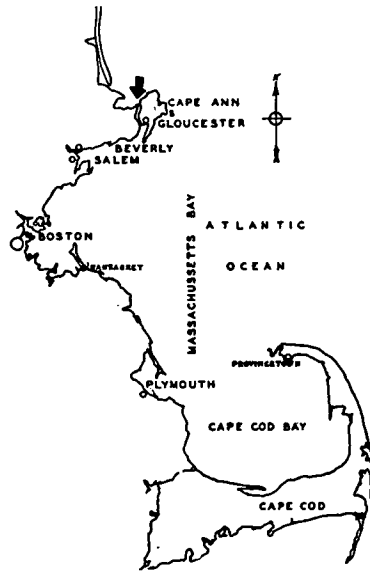
橋：アニスクラム河南  
端は、「運河」(The  
Cut) によってグロ  
スター港と結ばれ  
る。運河に架かる  
開閉橋がブリンマ  
ン橋 (The Blynman  
Bridge) である。船







Copeland & Rogers, *The Saga of Cape Ann*, p. 54 より。



MASSACHUSETTS BAY  
Where the Pilgrim and Puritan colonies were planted.

Melvin T. Copeland & Elliott C. Rogers,  
*The Saga of Cape Ann* (Gloucester, Mass :  
Peter Smith, 1983) p. 4. より。

を通す時、橋は開く。左図、参照。  
流入し、流出する河の姿。北端と南端の両方が海に向かって開いている

アニスクアム河は、本質的に海水の流れ込む入江である。北端と南端の河口は、したがって潮流が流れ込む所であり、また流れ出る所でもある。Copeland and Rogers, *Saga of Cape Ann*, 一七七頁より。  
発見サレザル地：ジョン・スミスが、ニューイングランドのある地域をこう呼んだ。後にプリストー (Bristow) に変える。スミス著『ニューイングランド素描』(一六一六年) 巻末の新旧対称名に旧名：発見サレザル地 (A Country not discovered)、新名：プリストーとある。  
Buttrick, 一三二頁。及び Edward Arber ed., *Travels and Works of Captain John Smith* (Edinburgh: John Grant, 1910) Part 1, 133頁。  
プリンマン・リチャード・プリンマン師 (Rev. Richard Blyman)。グロスターの初代聖職者。一六四三年五月、町当局の命を受け、グロスター港とアニスクアム河の間に運河を造った。これにより、グロスター港からアニスクアム河への交通が可能になった。  
Buttrick, 一三二頁より。  
犬岩：グロスター港の岸、「運河」河口付近にある一群の岩。  
Buttrick, 一三一—一三二頁より。

## Ⅱ 「トウイスト」読解

劇や小説のプロット同様、詩にも時間や主題などに沿った「進行」(Progression) があるのが普通なのだが、この詩が何に沿って「進行」しているのかを掴むのは容易ではない。その理由は、語られる事柄が多岐にわたるのみならず、語られる内容間に意味上の連関を見出し難いからである。内容Aと、続く内容Bとの間に不連続面が介在するようなのだ。だが、こうした意味論上の不連続 (semantic discontinuity) を何らかの方法で突き抜けない限り、『マクシマス詩篇』は解読不能なテクストに留まる他ないのである。とはいえ、円滑な読みを妨げるこうした不連続面を異物もしくは邪魔物扱いし、視線の彼方に遠ざける必要はいささかもない。詩を生み詩から生まれる

感受性が内容Aの位相から内容Bの位相へ目にも止まらぬ速さで移行した跡こそ、意味論上の不連続面に他ならないからである。<sup>⑤</sup>だからわれわれは、テクスト内に断層として現われる不連続面を軽がると跳びこえて、位相の異なる内容どおしを結びつけ主題系列と呼ぶべきものを形成する力の動きを、まずは追ってみる必要があるだろう。

極めて大まかに「トウイスト」の動きを追えば、こうなる。オルソンの生まれ故郷マサチューセッツ州ウースターを走る路面電車の駅名で始まった詩は、夢と記憶がないまぜになった光景を走馬燈さながらに展開した後、オルソンの第二の故郷とも言うべきマサチューセッツ州グロスターの感潮河川アニスクアム河河口から海へ出ていく花に何かとてつもない意味を込めて閉じるのだ、と。

しかし、このような余りにも大まかなまとめでは、何ひとつ明らかににはならない。詩を形成する声が少なくとも三つはあることが無視されているからだ。三つの声とは、幼年時代の想い出を語る声、夜見た夢を語る声、そして詩の書き手が詩を書く現在において発する声の三つである。以下、これら三つの声が語る内容を、いま少し詳しく検討して行くことにしよう。

# 1 記憶の水脈

「トウイスト」で記憶が前景化されているのは、

- (1) 父カール (Karl Olson) に連れられ、生まれ故郷ウースターを走る路面電車に乗り、郊外のパクストンやウースターに出かけた時の記憶 (冒頭及び一節前半) と、
- (2) 父母に伴われて初めてグロスターにやって来た日に、雨を透かして海を見た時の記憶 (二節冒頭)、

との二箇所である。共に少年時代の記憶であって、(1)はしばしば行われた行楽を、(2)はオルソン五才時の体験を描いているには違いないのだが、その内容は如何なるものであったのか？  
これを確認するためには、オルソンの記憶の水脈を辿ってみる必要がある。

## (1) ウースター発路面電車「追憶号」

まず知っておかなければならないのは、「トウイスト」が書かれる一九五三年五月現在、ウースターを走る路面電車は既に一輛もないことである。<sup>⑥</sup>一八九一年に街を走り始めた路面電車は、第一次大戦後自動車人がびとの主要な交通具になる時まで、隆盛を極める。街を縦横に走る路面電車は、市内のみならず大都市ボストンへも延び、ボストン高架鉄道への乗り継ぎさえ可能になった。市内と大都市、そして郊外が路面電車によって結ばれ、週末の郊外への行楽がブームになる。オルソンが父に連れられて郊外へ行楽に出かけたのは、路面電車が交通機関の花形であった一九一〇年代のことだと推測できる。しかし隆盛を誇った路面電車も、第一次大戦後自動車を通りにあふれ出すにつれて路線は次第に減り、一九四五年十二月三十一日以後、ウースターから路面電車は姿を消すのである。

だから、「トウイスト」冒頭で開口一番

路面電車こそ

おれの内陸水路

86  
1.82

と歌い始める時、マクシマスは作者オルソンの記憶の中を走る「路面電車」に呼びかけていることになる。「路面電車」の通る線路が「内陸水路」なのだから、これとてオルソンの少年時代の記憶の中に

のみ存在する亡霊路線に違いない。だが、マクシマスがわれわれを誘うのは、まさにこの不在の路面電車「追憶号」に乗って、オルソンの少年時代へ時間旅行をすることなのだ。

行き先はウースター郊外のパクストンあるいはホールデン。少年オルソンと父カールがここへ来た目的を、純粹な行楽とする解釈<sup>⑩</sup>と、貧しい家計の一助となるよう自家製ワインの材料集めに来たのだとする解釈と、二つの考え方があつた。だが、この二つの解釈は互いを排除する底のものではない。家計の助けになる「五月の花」<sup>メイ・イン・ラフワ</sup>「摘みや「イギリス・クルミ」集めが、楽しみであつたとしても少しも不都合はないからだ。そんなことよりも、少年オルソンと父カールが郊外で集めた花やクルミの名の方が、私には氣にかかる。自家製ワインの香料として役立つ草花や木の実はいくらでもあるように、わざわざアメリカ建国当初を思い起こさせずにはいない「五月の花」や「イギリス・クルミ」の名が挙げられているからである。「追憶号」が見せる風景は、ことによると少年オルソンの記憶を越える風景なのではあるまいか。たとえ、歴史好きの父カールとその影響を受けたオルソンが、アメリカ建国に深く関わる名の花と木の実を実際に二人で集めたとしても、事情は変わらない。つまり、少年時代の記憶に向かつて過去を遡つた「追憶号」は、作者オルソンが「トウイスト」を書くエクリチュールの現在に向かつて、記憶の棲むウースターから猛スピードで戻つて来るのだ。そして、一九五三年五月現在までの生の総体を載せるや、瞬く間に過去のウースターへ帰って行く。こうした往復運動ゆえに、現在が記憶の風景へ無媒介に侵入する。アメリカ建国を強く想起させる「五月の花」と「イギリス・クルミ」が、数ある花や実のなかから選ばれたのは、その結果であるに違いない。少年時代の記憶は、現在に向かつて大きく開いているのだ。

「トウイスト」冒頭が教えるのは以上のことである。

一節前半で「追憶号」が見せてくれるのは、やはりウースター郊外パクストンの休日風景である。

……電車は

遠くの土地へ降りて行く

(日曜日の土地へ)

ぼくは小さく、皆が

どこへ行くのか、不思議で

しょうがない。みんなは大きくて

父さんとぼくから離れて行く

まるで、その風景の中の雌牛のように

自分たちが何をしていて

どこへ向かつているのか

分かっているのは、

父さんとぼく二人きりのよう

この箇所について、ウースターの学者ローラ・ジェーン・メニデスはこう言う。

オルソンにとってウースターの思い出は父の思い出と緊密に結びついている。他の人々とは違って、オルソンの父は方向を見失つてはおらず、自らの人生に方向と目的を与えていた。息子の人生にも。だから二人とも「どこへ向かつているのか」分かっていた。

そうだろうか？父と自分だけが他の人々と違っているという感覚は、優越感よりはむしろ孤独に結びついているのではなからうか。

「皆がどこへ行くのか、不思議」なのは、「ぼく」が「小さい」せいなら、「ぼく」が「みんな」のように「大きく」なれば、皆の行くところが不思議ではなくなるはずだ。行楽地パクストンに相応しい行動をしているのは、「父さんとぼく」ではなく、「みんな」の方なのかもしれない。

前掲引用なかばの「まるで、その風景の中の雌牛のように」(as cows on that landscape)が鍵になる。「雌牛のよう」なのは、「みんな」なのか、それとも「父さんとぼく」なのか？メニデス女史は「みんな」＝「雌牛」と取っているようだが、私には「父さんとぼく」の方が「雌牛」に見える。原文はこうだ。

I am small, people go off  
what strikes me as questionable  
directions. They are large,  
going away from my father and me,  
as cows on that landscape.

87-88 「イタリクス平野」

文法的には“as cows on that landscape”は、「みんな」(They)にも「父さんとぼく」(my father and me)にもかかりうるから、この箇所だけ見る限り、「雌牛のよう」なのはどちらか決定できないのであるが、四行先の記述が、有力な手掛かりを与えてくれる。

今でも、約束の地としか思えない場所へ  
幾組ものカップルは、向かって行ったのだった。おれたちから

直角に離れて。

とばした三行の間に、詩はマサチューセッツ州ウースター及びグロスターの名の元となったイギリスの同名の都市へ一たん飛び、ここで再び少年時代の回想に戻っているため、「父さんとぼく」という子供言葉が「おれたち」という大人の言葉に変わっているが、パクストン体験が語られていることに変わりはない。ただ、ここでは「大きく」なった大人の眼で少年時代の体験がとらえ直されているので、「小さな」オルソンが感じた「不思議」は、不思議ではなくなっている、という違いがある。

「みんな」とは大人の男女の「カップル」であり、花や木の実を「まるで、その風景の中の雌牛のように」集めているオルソン親子とは、全く別の目的でパクストンにやって来ていたのだ。「約束の地」(the promised land) 目指して、カップルはオルソン親子から「直角に離れて」(at right angles / from us) 去って行く。「約束の地」とは、大人の男女が二人きりになれる場所、もしくは二人きりになった男女が到達しうる快楽を指す言葉にちがいない。雄であり雌であることの快楽を味わいつくそうとする「幾組ものカップル」には、ひたすら花や木の実を集めるオルソン父子が「雌牛」に見えたとしても不思議はない。

他の人々と違っていることが優越感ではなく孤独に結びつくよう感じられたのは、パクストンの記憶が性への憧れを秘めたものであったからなのだ。このことを確かめたわれわれは、ウースター発路面電車「追憶号」の旅を終え、グロスターに記憶の水脈を探ることにしよう。ただし、ごく短時間で。

(2) グロスター発「沿岸航海号」

父カールと母メアリーに伴われて、マサチューセッツ州アン岬の漁港都市グロスターに初めてやって来たのは、一九一五年夏、オルソン五才の時である。以後、一九三四年までオルソン一家は、ここで夏を過ごすことになる。ウースター郵便局勤務の父は、週末になるとやって来るという方式だった。

初めて海を見た時の体験は、『トウイスト』二節冒頭にこう書かれている。

われわれ一家が着いた日の  
グロスターは雨。

87  
[1.83]

それ以来、舟で港を巡るおれだが、

ジョニーズ・キャンディ・キッチン店内から

窓ガラス越しに雨を透かして見たのが

海を見た

初め

一見、五才時の体験をそのまま記した文のようだが、そうではない。ここには、『マクシマス詩篇』全体に対する、詩作の現在における評価が入り込んでいるからだ。

前掲引用三行目「それ以来、舟で港を巡るおれだが」がそれだ。確かにオルソンには、一九三六年七月スクナー「ドーリス・M・ホーズ号」に乗り込み、モウルトン船長指揮のもと三週間メカジキを追った体験があり、『マクシマス詩篇』「手紙 6」にその時のことを書いてもいる。だが、物理的に海に出たのはこの三週間だけなのである。ならば、

それ以来、舟で港を巡るおれだが、

という一行は、何を言っているのだろうか。

私はこう解する。この一行は、書きつつある『マクシマス詩篇』全体が、アメリカの始源の地グロスターをめぐる沿岸航海に他ならないことを宣言しているのだ、と。「舟」とは『マクシマス詩篇』を書くペンの別名なのである。

記憶の水脈は、陸路を辿るにせよ海路を辿るにせよ、始まりへ向かって大きく開いているのだ。とりわけ書くことの始まりに向かつて。

〔次号完結〕

(本研究は平成10年度相山女学園大学学園研究費助成を受けてなされたものである)

#### 注

\* 本稿は、一九九七年十一月十五日名古屋大学で開かれた日本アメリカ文学会中部支部十一月例会で行なった口頭発表「夢の記述—The *Maximus Poems*, “The Twist”について」に基づいている。

(1) 現在出版されている『マクシマス詩篇』は、一九六〇年に出版された『第一巻』と一九六八年出版の『第二巻』に、作者オルソン(Charles Olson, 1910-1970)の死後出版された『第三巻』(一九七五年)を加えて合本としたものである。本稿で使用するのは、この合本 Charles Olson, *The Maximus Poems* ed. by George F. Butterick (Berkeley: University of California Press, 1983) による。

(2) 拙論『手紙』を運ぶオルソン—Charles Olson, *The Maximus Poems* 試論—(下)『相山女学園大学研究論集』第22号第1部(一九九一年)一一一—一二頁参照。

- (3) 『第二巻』(*The Maximus Poems IV, V, VI, 1968*)に入ると、詩の焦点はグロスターから離れ、更に内陸のドッグタウン(Dogtown)に移る。
  - (4) 線の上段に記された数字は、合本の頁を示す。下段の記号1は『第一巻』を示す略号であり、数字は各巻ごとの頁数を表す。したがって861.2は、合本の八六頁、『第一巻』八二頁の意となる。
  - (5) 傾いた傾向はオルソンに限ったものではなく、エリオット(T. S. Eliot, 1888-1965)、 Pound (Ezra Pound, 1885-1972)、マクスウェル(Louis Zukofsky, 1904-1978)に共通するものであるが、オルソンにおいて意味論上の不連続が最も顕著に、且つ方法的に使用されていると私は思う。
  - (6) 『投射詩論』(一九五〇年)の第三の要諦は、プロセスに従うことであった。
- 形式が完成するうちにエネルギーを形造る術は、プロセスに従うことだ。一つの直観は即座にしかもじかに、更に先の直観に移行しなくてはならない。詩人は常に最高の速度で動き、あらゆる部分でプロセスを用いる必要がある。
- Charles Olson "PROJECTIVE VERSE" in: Charles Olson, *Selected Writings*, ed. by Robert Creeley (New York: New Directions, 1966)、一七頁以下。
- (7) アメリカ詩人トム・クラーク(Tom Clark, 1941-)は、『オルソン伝』の中で、オルソンがグロスターに初めてやって来たのを一九一五年夏と述べている。Tom Clark, *Charles Olson: The Allegory of a Poet's Life* (New York: W. W. Norton & Company, 1991)、八頁。
  - (8) ウースターを走っていた路面電車に関する本稿の記述は、Albert B. Southwick, "A streetcar named Tannuck" in: *WORCESTER MONTHLY* May 1988 vol. 1, No. 8, 四〇—四五頁に基づいて。
  - (9) 無論、父とのみ出かけたのではなく、母メアリー(Mary Olson)も一緒に出かけたと考えられなくてはならない。家族三人で出かけたと言うローラ・メニデスも、父カールとオルソンとの結びつきの方を重視している。Laura Jehn Menides, "Choosing One's Place: Charles Olson, Worcester, and Gloucester" in: *The Worcester Review*, vol. 7, 1984, 二八一—二九頁。トム・クラークは、父カールとオルソンの二人だけで出かけた、と述べている。Tom Clark, *Charles Olson*, 八頁。
  - (10) Laura Jehn Menides, "Choosing One's Place," 二一八頁。
  - (11) Tom Clark, *Charles Olson*, 八頁。
  - (12) Charles Olson, *The Post office: A Memoir of His Father* (San Francisco: Gray Fox Press, 1966)、二五頁。
  - (13) Laura Jehn Menides, "Choosing One's Place", 二九頁。メニデス女史は、一九九七年九月現在ウースター工芸大学(Worcester Polytechnic Institute)助教授。
  - (14) George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson* (Berkeley: University of California Press, 1978) 序論六〇—六一頁の年譜より。
  - (15) Tom Clark, *Charles Olson*, 九頁。
  - (16) George F. Butterick, *A Guide to the Maximus Poems of Charles Olson*, 序論六一頁、及び本文四三—四四頁。